用水路表示板設置について

「こだいら　水と緑の会」代表　馬場　政孝

小平市内の用水路のうち、4箇所に表示板を設置することができた。2/20日にはグリーンロード親水公園にて、小林小平市長をはじめとする市の関係者の方々、表示板の製作・設置に協力・尽力いただいた『森と人情報館　青らんぎ』の菊池社長・内野氏、市民の方、会員が参加して、晴天の下賑やかなセレモニーが行われた。新聞4社が取材に訪れ、カラー写真とともに記事が報道された。ジンダイカツラの大きな板には金子　土竜氏の筆になる「大沼田用水」の文字が描かれ、享保14年（1729）に開削されたこと、流れているのが多摩川本流の自然水であることの簡単な説明が与えられている。柱は雨に強いヒバを用い、屋根には杉皮が葺かれ、柱と屋根部の構造材には柿渋が塗られている。屋根下の構造部の細工を見れば、非常に凝った造りであることが一目で分かる。これは、『青らんぎ』の菊池社長・内野氏が気持を込めてこれ以上は無いという最良のものを製作してくれた結果である。この表示板はどの人に聞いても大変に評判が良い。

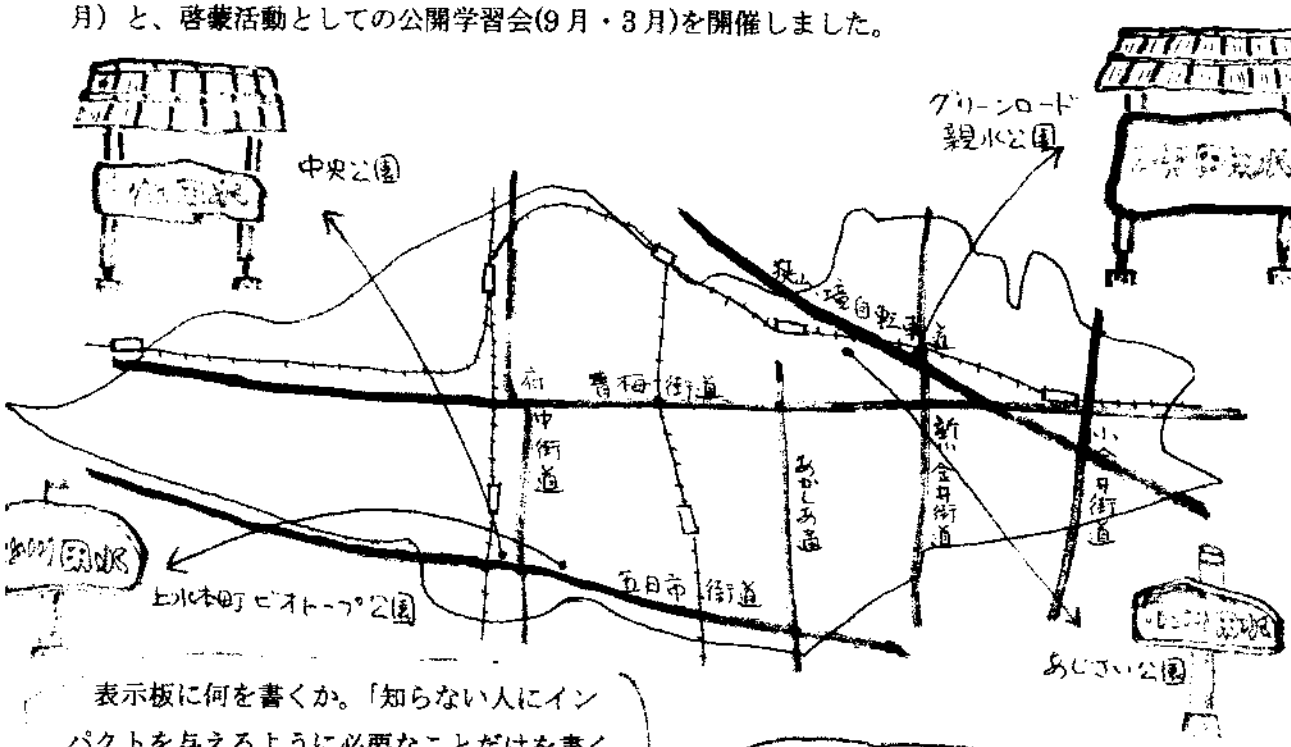
当会の活動が具体的な形となって現れたことは大変喜ばしいし、その意義も大きいといえよう。多くの市民に、用水路の名前・開削年・流水の特質を知ってもらうことは、用水路を活用した街づくりの第一歩であろう。表示板を設置した所では多くの人が足を止め、書かれたことを見て「そうだったのか、知らなかった」と一言感想をもらしていく。

用水路は何と言っても小平の歴史そのものである。玉川上水から小川用水が引かれて小川村が誕生し、小平の発祥となった。その後いくつかの用水路が開削されて村は発展していく。明治になって新堀用水が開通され取水口は統合されたが、水道や井戸の普及によって飲み水としての役割は後退し生活用水としての機能を果たしていた。車社会に移行する頃には雑排水が混入して悪臭を放ち、交通の邪魔になって蓋をかぶせられたり、暗渠となって上は道路の一部になったりした。全国的にも都市部の用水路は似たような命運を辿ったようである。しかし今日、全国的に用水路の復活が図られるようになり、コンクリートとアスファルトの無機的な都市空間における生活に、潤いと歴史を感じさせる環境保護・文化的施設とみられるようになってきている。

小林市長が話されたように、小平の用水路は350年も前の姿をそのまま残して維持されている全国でも稀な歴史的遺産である。表示板設置を機に用水路に対して市民の関心が高まり、その保護と今日的活用の道がおおいに開けてくることを期待したいものである。当会は今後ともそのために微力をささげたい。

平成19年度　第二回小平市市民活動支援公募事業報告

今年度は、実践活動として用水路の名称を記した表示板の設置（2007年10月～2008年2月）と、啓蒙活動としての公開学習会(9月・3月)を開催しました。



表示板に何を書くか。「知らない人にインパクトを与えるように必要なことだけを書くのがいい。」会員の一言でシンプルな表示となりました。確かに「まずは名前」を知ってもらうこと。そして流れているのが多摩川本流の自然水であること。

さらに、今回の表示板設置については実に多くの方々の善意の協力がありました。まず「字」ですが、これは青梅市在住の禅僧　金子　土竜氏の手によるものです。筆を持たれて40数年。日展にも10回以上入選されております。「世のため人のため」になるならと快諾してくださりました。

大沼田と新堀の表示板は杉皮で葺いた屋根付の立派なものですが、この製作にあたっては「森と人情報館　青らんぎ」の協力があります。キチンと設計図も作り、手がけた大工さんの熱い思いが如実に見て取れる素晴らしい出来上がりです。

また、表示板の製作・設置を挟んで好評につき2回に亘って開かれた公開学習会。講師の矢崎氏の話が面白く、参加者・会員ともに充実したひと時を楽しめ大変参考になりました。

本当に色々な方々のご理解とご協力をいただいた表示板です。紙面を借りまして改めて深く感謝の意を表したいと思います。

皆さん、ありがとうございました！！

用水路を大事に想う気持が伝われば幸いです。　　会員一同

水 に 想 う

太田　和秀

縁あって 10 年前から小平市に住んでいます。引越しした当初は、それまで住んでいた練馬の団地に比べると、ずいぶん郊外に来たものだなと感じていました。特に、家の庭のすぐ前に水路のようなものがあり、当時は水の流れも無く「いったいこれは何なのだろう」と不思議な思いでしばらく過ごしていましたが、年に 2 回ほど専門業者の方々が草刈をするので公共物に違いないと思い始めました。そんな矢先に玉川上水に関する講演会があると市の公報で知り、好奇心に駆られて会場に勇んで出かけました。去年の秋のことです。会場の公民館には多数の市民が集い、コンシェルジュを自認する講師の方のお話に聞き入っていました。私も昔から玉川上水には少なからず興味があり、羽村から都内まで水路沿いに歩いたりもしていたので、興味津々でお話を伺いました。そしてその講習会で、なんと我が家の庭先の水路も玉川上水からの分水であることを知り、ますますこの土地の歴史に関心を深めた思いがしたものです。

公演が終わり、会場で図々しくもお茶などをいただくと、用水路を守る市民活動まであることを知り、誘われるままに近所の親水公園の保全活動に参加し始めました。これが私と「こだいら　水と緑の会」の馴れ初めです。会社員生活を 30 数年続け、一昨年に退職しましたが、いずれは地域のコミュニティ活動に参加しようと思っていたこともあり、格好の出会いだったと思います。

小樽運河にて

ヨーロッパでは昔からグリーンツーリズムという発想があり、自然を人間と関わりやすい形に保ちながら利用し親しんでいくことに熱心です。日本でも里山という言葉に代表されるように、都市との接点に人と自然との共存共栄の姿がいまでも垣間見られます。このような発想と意識が半世紀ほど前に人々の心の中に浸透していれば、東京やその郊外の姿もだいぶ今とは違う形になっていただろうと思います。それでも、今は地球規模での環境保全の動きもみられ、里山の知識が活かされる機会はこれからも遅くはないと信じつつ活動を続けたいと思っています。

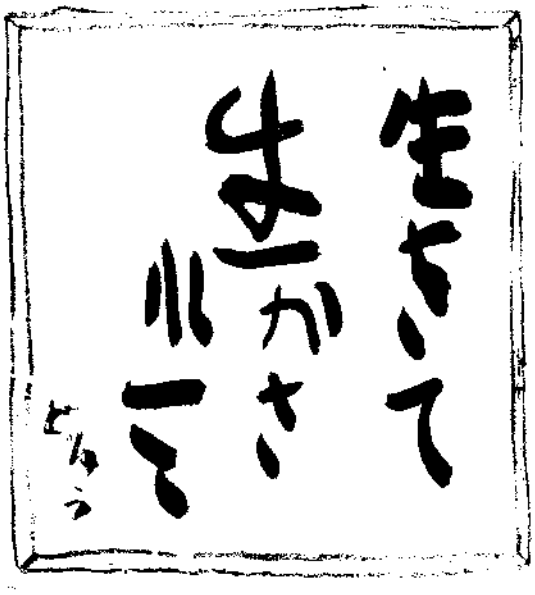
昨年の暮れに家内と北海道を旅行した折、小樽に立ち寄りました。ここは港に面した運河の保全で有名ですが、もともと樺太との貿易のため人為的に作った運河も、道路拡張計画を中心とした高度経済成長の荒波に一時は消滅の危機に見舞われています。それでも、市民を中心とした保存運動の結果、なんとか消滅を逃れたそうです。ただし、幅は昔の半分ほどに縮小されたそうですが、いまでも多くの観光客がこの地を訪れ、地元の人々にも憩いと生活の潤いを与え続けています。人間の知恵で自然をうまく生活の中に取り入れていけば、これほど心を豊かにするものはないのではないでしょうか。この点、小平は都市と農村の接点に位置しながら発展してきた長い歴史があり、残された雑木林や用水路、そして農耕地などは市民の貴重な共有財産だと思います。

小平市内に今も多摩川の自然水が流れている奇跡に感謝する今日この頃です。

用水路のアイディア―ありがとう！

白井　進

過日、「小平の街づくり　緑からの提案」展に行ってきました。
毎年、この時期に、国土建設学院造園緑地工学科の学生さんの卒業制作を、市民の皆様に、市内の各地を選定して、こんな緑化のデザインはいかがと提案する試みです。



今回は、3件の作品に用水路が配置されて癒しの環境がデザインされたと感じました。そうです、我田引水ですが、水は脈々と時を流れて人々の心身に癒しの力を与えています。

国土建設学院の卒業生の皆さんが、地球の各地で活躍してくれることと期待して、作品のアイディアを発展させ、私達は市内の用水路の整備に取り組んでいけると感謝しています。

ドキドキしながらの用水路探索

矢崎　功

玉川上水の鎌倉橋近くに住居を構えてから20年になろうとしている。

当時は時折上水堤を散歩程度に利用することがあっても、それほど関心の無い存在であった。ましてやその脇を流れている新堀用水の存在については全く関心が無かった。停年退職を機に時間のゆとりが少し出来た頃、新聞のちょっとした記事がきっかけで玉川上水に関心を持ち、関連して新堀用水の名前を覚え、今でもここには多摩川の水が流れていることを知り興味が湧いた。

休日を利用して羽村から四谷大木戸跡までの玉川上水路の探索とともに市内の用水路の探索が始まった。何故に、どんなルートで、どこまで流れているのか。デジカメを背負い、徒歩で、ある時は自転車で水路を辿った。

市内用水路の探索は最初の頃は殆ど事前の調査無し、地図も持たないでひたすら用水路や用水路跡を辿る。市内用水路の多くは民家庭内を流れるため、塀越しに覗き込み、先を予想して公道を大回りし、次の道から流れを確認する。こんなことを繰り返し、写真に収め、家に帰ってから地図で確認。記載が無いところは新たに記入する。途中水路を見失うこともしばしば。こんな時はその付近の道路の一番高い所を捜し、その両側の民家を覗き込むと、水路や水路跡を発見できることがしばしば。自然河川であれば土地の低い所を流れるが、用水路は多くの場合一番高い所を流れている。

実際歩いてみると、地図上では分からない地形上の制約やそれを工夫した知恵が偲ばれる。未知の水路を探索した時、次にどんな展開があるのかを予測するドキドキ感は今でも忘れない。

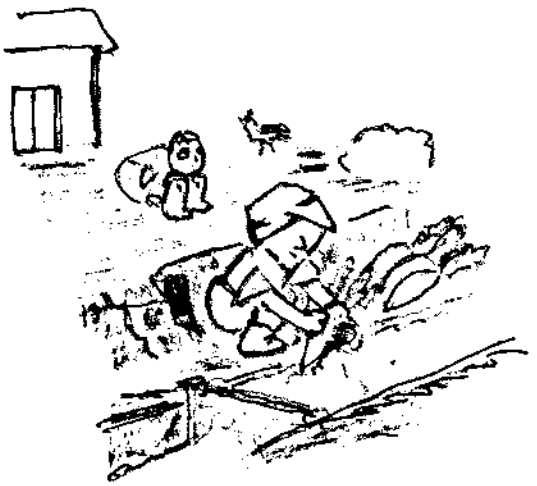
その後多くの資料で市内の用水路はかなり詳細に知るところとなったが、今でも用水路を辿る時は、季節やその都度変わる流水の状況など、新たな発見を期待しドキドキしながら歩いている。

用水路のこれからの可能性

留松　里詠子

人は水がなければ生きていけません。もともと水の乏しかった小平の地を潤し、人の住める環境に変えた用水路は今も市内を流れ、その事実を語りかけています。

街を歩いてみることから湧いてくる疑問は、その街の成り立ちを気付かせてくれます。私は市外から小平の学校に通っていましたが、例えば青梅街道沿いに見られる短冊形の土地の区画について不思議に思っていました。それは青梅街道と並行して走る小川用水の水を、各家庭が平等に共有するための工夫であると分かりました。私は歴史やエコロジーへの関心から「こだいら　水と緑の会」へ入会しましたが、意識的に用水路と関わるまでは、「小平にはなんて曲がり角の少ない不便な道が多いのだろう。」と疑問に思っていました。水を得ることがいかに難しく切実な問題であったかということは、用水路を辿っていくと理解出来ます。神明宮や小川寺といった寺社をはじめ、初期に造られた学校等の施設も、用水路が敷地を通っていたり、その側にあるようです。



平成18年まで国に所有権があったため、小平市内には総延長51ｋｍもの用水路が残されました。今私達は用水路の水を直接飲んだり、炊事や洗濯にも使っていないため、用水路を保全していく目的を実感できなかったり、またはその存在に気付かない人も多いことでしょう。これからは用水路の持つ可能性を新たに見つけて、**生きた形で保全していく**のが良いと思います。

これからの**用水路の可能性**をいくつか考えてみました。

多摩川から玉川上水が分水し、さらに細い水路へと分水されるという、江戸時代の歴史的遺産としての玉川上水の水系計画は、高低差による位置エネルギーのみで配水が可能であり、地球環境を守っていくこれからの時代に活用するべきだと思います。素堀りの水路は水を吸収してしまい全ての水を行き渡らせることは出来ませんが、それは却って地下水として浸透したり雨水を吸収して水害を緩和してくれるという面を考慮するべきです。環境問題との関連では、ヒートアイランド現象の緩和にも貢献出来るでしょう。

そして、せせらぎのある空間は人を癒してくれます。現に空堀の状態にあった玉川上水や野火止用水は、近隣の住民の要望に応える形で清流が復活したものです。水辺の復活を望む人々は確かにいるのです。用水路は人工の川ですが、それは人の暮らしを支えるだけでなく周囲の生態系と溶け合うことが出来ました。そこには様々な生き物が棲んでいるから

です。**都市の中の身近な自然として、その街にふさわしい形で残す**ことが出来たら、都市の景観にも潤いが生まれるでしょう。

このような用水路の複合的な機能を別々に考えずに「ひとつ」のものとして捉えたいと思います。ただ水辺を取り戻すといっても、玉川上水とその分水路に多摩川の水を流し再生を図ることは容易ではありません。首都圏全体の水利権の再分配を伴うからです。切り刻まれた管理体制を見直さないかぎり、「ひとつ」にはなかなか到達できないでしょう。

水辺を取り戻す私達の会の運動が、運動のまま終わらないでほしい。皆がごく当たり前のように「水」を大切にするようになったらいいなと、用水路を流れる多摩川の綺麗な水を見て感じます。

新宿御苑・玉川上水・内藤新宿分水の話（34番目の分水）

富永　英一

新宿御苑沿いの園路（旧新宿門から大木戸区間約650m）に150年ぶりに用水路が、来年度（20年度）から新宿区において4年間・6億円を掛けて造られます。これは20年前から「昔からあった上水の復活をさせよう」という地元の有志が運動してきたものが、小池環境大臣当時に区長などとの話から現実味をおび実際の計画となったものです。

環境省のモデル事業にもなり、歴史文化のアピールにもなりで「造ろう」ということになりましたが、本来の玉川上水からは技術的・経済的に水は引けないので、御苑地区内の地下の湧水をポンプアップして昔の上水路跡（今の甲州街道、御苑部分の脇）に流そうというものです。

近くの小学校の子供達も、学習の場としても大事なので事前に上水の勉強をし、流れの始めの羽村へ見学に行くなどしています。街づくり推進協議会・環境ネットグループも期待して、出来上がったらサポーターも募集して管理助勢の計画を立てようと意気込んでいます。水路は幅80~150ｃｍと潤いもあり、クールアイランドなどの創出を目指すそうです。

小平ではともすれば恵まれすぎて、あるのが当たり前になって関心が薄くなっている用水路。もう一度再確認していきませんか、皆で。それに小平は、上水の入り口から出口までの丁度中心に位置する大事な場所なのです。新宿では、上水沿いの学校などで交流できれば、との話も出ています。

玉川上水・内藤新宿分水設置について

玉川上水は今から350年前に造られ、羽村から43ｋｍを経て内藤新宿まで届き、四谷大木戸水番屋が江戸市中の水の拠点となっていました。江戸市民の飲み水として、当時高い技術で市内くまなく樋や水桶が配置されていました。人口が急増する江戸市民の飲み水不足を解消するのが狙いですが、次には市民の食料を確保するために新田開発が奨励されました。それを受けて、羽村から四谷までの間に分水が引かれ、もちろん小平の用水もそうですし、富永氏の話にある内藤新宿分水もそうです。内藤新宿の分水は玉川上水の34番目の分水に当たります。現在新宿御苑内の内藤新宿分水は水路跡が残っているだけですが、新宿区はそれを150年ぶりに復元するのです。素晴らしい計画だと思います。

小平の用水路は350年前の形がほぼそのままに残っています。また流れているのは多摩川本流の自然水です。そんな用水路が都心近くに存在していることは奇跡といえます。

新宿区に続き、小平でも用水路を見直しましょう！

平成20年前半の予定

4月　　2日　用水ボランティア・・・小川一番～小川緑地
5日　市内雑木林保全活動参加
16日　グリーンロード親水公園掃除
市との対談
5月　　11日　　グリーンフェスティバル参加
6月　　2日　奥多摩植樹事業参加
3日　全国一斉身近な水環境の水質検査参加

※　聞き取りについては、「小川一番から八番までの人々」を予定
※　平成21年度の用水路の整備について検討

新会員紹介

太田　和秀氏

海外経験豊かなアイディアマンです。話題作りも得意。趣味の水彩画は玄人はだし。戦力として期待一押し。

富永　英一氏

グリーンロード親水公園で週2回掃除をされています。用水路や野草を愛する自然派です。

編集後記

間もなく当会も発足以来満6年を迎えます。今年度は表示板設置という大きな仕事があり、本当に色々な方々に支えられたのですが、会員相互の結びつきも強まったように思えます。これからも小平の用水路を活かしたまちづくりを目指し、人の輪を広げていけたらいいと願います。（淑）

問い合わせ・ご質問　　042-345-6772（馬場）
ＨＰは　http://www009.upp.so-net.ne.jp/water-green/